

万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行
浄土真宗本願寺派 万行寺
住職 山崎信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾461-1
電話 0267-67-2460

2025(令和7)年

仏暦2568年

5月号

(第164号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



住職 法話

おのずからそのようにあらしめる



正信念仏偈に学ぶ
憶念弥陀仏本願
自然即時入必定
ば、自然に即の時必定に入る。

「現代語訳」
阿弥陀仏の本願を信じれば、おのずからただちに正定聚に入る。

この句は次の二句にもつながり、龍樹菩薩のお書きになった『十住毘婆沙論』(現代語訳)の中に、

阿弥陀仏の本願には、「もし人が、わたしを念じて名号を称え、自ら帰依するならば、速やかに必ず仏になることが定まった位に入り、この上ないさとりを得るであろう」と誓われている。だから常に心に念じているがよい。とあり、これを親鸞さまは引かれました。また、親鸞さまは『高僧和

讃』にも、

不退のくらゐすみやかに

えんとおもはんひとほみな

恭敬の心に執持して

弥陀の名号称すべし

「不退転の位を速やかに得ようと思う人は、みなあつく敬う心から阿弥陀仏を疑いなく信じ、その名号を称えるがよい。」と詠まれています。

お題の二句は、その阿弥陀

仏を疑いなく信じてること(信心)は、仏になることが定められた直接の原因であるといふことで「信心正因」と

いわれるところです。

特に、親鸞さまはそこに

「自然」と加えられ、『親鸞聖人御消息』(現代語訳)

に、

「自然」ということについて、「自」は「おのずから」ということであり、念仏の行者のはからいによるものではないということ

です。「然」は「そのようにあらしめる」という言葉です。「そのようにあらしめる」というのは、行者の

はからいによるのではなく阿弥陀仏の本願によるのですから、それを「法爾」といいます。

とあるように、信心は特別な行いをしたから得られるのではなく、阿弥陀仏の本願のお力(他力)によって「おのずからそのようにあらしめる」ものであると言われるのです。ですから、念仏は「他力念仏」と言われるのです。

ところで、この『正信念仏偈』に学ぶ法話を進めるに当たって、多くの関係本を手にして諸先生方のお言葉を頂

かなくては進められないものです。比較にはなりません、親鸞さまも、お釈迦さまや高僧方がお説きくださったものを引き讃え、ご自身の味わい

も加えながら著を進められます。さらに教えも複雑になります。お題に上げる二句は、

十四文字の短い句ではありませんが、あらためて揺らぐことのない親鸞さまの教えの奥深さを味わえるものです。

浄土真宗 新 仏事のイロハ

五、礼儀と作法

― お寺に親しむために ―

「金封の表書き」

「御霊前」とは書きません

前項で、御布施というのには「報謝の念から仏さまに捧げるもの」とであると申しました。実は、浄土真宗の仏事で捧げるものは、すべてこうした御布施です。しかしながら、実際には、仏事の種類や状況によってさまざまな表書きが用いられているようです。

まず、葬儀や法事などで喪主（施主）が僧侶に差し出す金封には「御布施」と書かれることが多いようです。この「御布施」は僧侶への報酬ではなく、お寺のご本尊・阿弥陀さまにお供えするためのものです。ですから、差し出す時には、お盆にのせ「おこ」とづけして失礼ですが「おこ」といった言葉を添えると丁寧で

す。また前もってお寺に来て、上げられる方もいます。僧侶に渡す金封で、「御布施」以外の、「御礼」「御経料」「回向料」などは趣旨から言つて、ふさわしくありません。

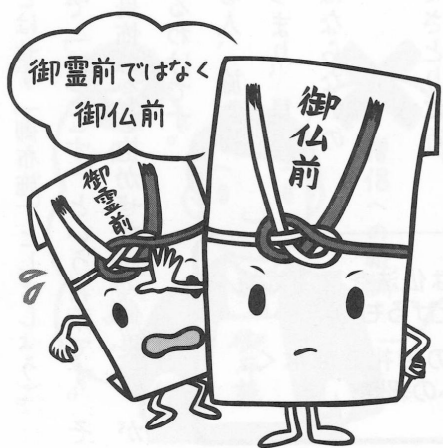
次に、他家の葬儀や法事に参列した場合です。仏事関係の本には「御霊前とする」と書いてあったり、「御霊前」の文字を印刷した金封もありますが、故人の霊に捧げるのではなく、仏さまに捧げるので、書くなら「御仏前」です。ほかに「御供」「御香典」「御香資」などが使われています。香典や香資は「香を求めるとの代金」という意味

で、昔は、お供えの代表格がお香だったからでしょう。

ところで、最近の葬儀で「御香典」を受け取らないケースが見られます。「香典返し」が面倒なのか、参列者にお金の負担をかけたくないのかわかりませんが、仏さまへ捧げる「御香典」を、自分のもののように思っているとすると、心得違いです。「御香典」は断わるべきものではありません。

「入仏法要」などの慶事に参列する時は「御祝」でもよいでしょう。また、お寺にお参りした時は「志」も使われます。「お寺のために役立ててほしい」という思いからです。

「浄土真宗 新 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より



年忌法要表

1 周忌	2024 (令和 6) 年	23 回忌	2003 (平成15) 年
3 回忌	2023 (令和 5) 年	25 回忌	2001 (平成13) 年
7 回忌	2019 (令和 1) 年	27 回忌	1999 (平成11) 年
13 回忌	2013 (平成25) 年	33 回忌	1993 (平成 5) 年
17 回忌	2009 (平成21) 年	50 回忌	1976 (昭和51) 年

編集後記

関係本といえ、本願寺には「本願寺出版社」があります。そこから、聖典の現代語版が次々と発行されています。最近、七高僧の著も出されるようになり、最初にあげた龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』（現代語版）も発行されたばかりです。編集に大変助かっています。さらなる発行を望むところです。